

芥川賞受賞記念エッセイ & 本文試し読み
特別小冊子

むらさきの スカートの女

今村夏子



様々な解釈ができると
選考会がわき、
文句なしの受賞決定!!

あなたは、
どう受け止めるか。
二〇一九年、最大の話題作

**TAKE
FREE**

すべての人に、価値ある一冊を

ASAHI
朝日新聞出版

定価 1,300円+税 四六判

芥川賞受賞記念エッセイ 3

むらさきのスカートの女と、私

何とも思わなくなる日

人と接しない仕事

ぐるりと回るレストラン

芥川賞に決まって

芥川賞選評より 18

各紙に掲載された書評より 20

書店員さんによる感想 22

『むらさきのスカートの女』 本文試し読み 27

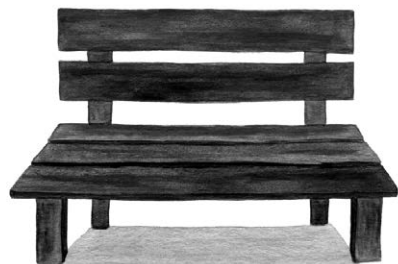


イラスト 榎本マリコ

芥川賞受賞記念エッセイ

むらさきのスカートの女と、私

自宅マンションの、物置小屋と化した部屋のすみで小説を書いている。折り畳み式の机の周りには、古新聞や古雑誌、梱包されたままの扇風機、キャスター付きの防災バッグに、衣装ケース、壊れたプリンタ、ドンペン君のぬいぐるみや、古着でパンパンになったポリ袋などが、所狭しと置かれている。

書けない時、私はこの部屋のせいにする。こんな所にいるから書けないんだ、環境が悪い、と。

『むらさきのスカートの女』を書き始めた時もそうだった。書けない原因は、すべてこのゴチャゴチャした部屋にあるのだと考えた。そこで、部屋を片付けよう、とは思わなかった。部屋を出て、ドトールへ行こう、と思い立った。

去年の秋頃、私は遅々として進まない『むらさきのスカートの女』の原稿を携えて、ドトールへと向かった。

大阪市内にドトールは数多く点在しているが、ドトールならどこでもいいというわけではなかった。私の目指すドトールは、自宅から一時間十五分もかかる場所にある。

地下鉄を乗り継ぎ、ようやく店のドアの前に立った瞬間、ここなら絶対に書ける、と確信した。二〇一七年に刊行された『星の子』は、この店で書いたのだ。ここは、他のドトールとは、ちよつと違う。どう違うのかと言うと、まず、どこよりもトイレがきれいだ。そして、どこよりも店員さんの愛想がいい。あと、どこよりもお客さんの数が少ないため、どこよりも静かだ。そして、何と言っても、ここには私専用の席がある。

店内に入ると、「いらっしやいませ」と懐かしい声が迎えてくれた。二年前、毎日のように顔を合わせていた店員さんだった。相変わらず笑顔がすばらしかった。「どうも、ご無沙汰してます」と心の中で挨拶をし、アイスコーヒーを注文した。

グラスを受け取り、二階へと続く階段を昇る。二階の奥の方にある、丸いテーブル席が、私専用の席となっている。座席の横にはガラス板が張っており、ガラスの向こう側は喫煙ルームなの

だが、強力な空気清浄機が置かれているのか、けむりにもおいても気にならない。前回は、ここで『星の子』を書いていた。今回は、『むらさきのスカートの女』だ。自宅で集中できないぶん、今日は思いきりがんばるぞ。そう意気込みながら、二階のフロアに足を踏み入れた。と、ここで、想定していなかった光景が目飛びこんできた。私の席に、誰か知らない人が座っていたのだ。スーツ姿の男性だった。誰だろう、ひょつとして、ご存じないのだろうか。「すみません、そこ、私の席なんですけど……」

喉まで出かかった言葉をグツとのみこみ、仕方がないので、そのへんの空いている席に腰を下ろした。ノートを開いてみるも、先ほどまで漲っていたやる気は、どこかへ消えてなくなっていた。三十分ほど待っていたが、男性が動こうとしないので、あきらめて店を出た。結局、この日は何も書けなかった。大丈夫だろうか、こんなん。かれこれ二カ月の間、書いては消し書いては消しを繰り返している。〈わたしは「むらさきのスカートの女」と呼ばれている。〉という最初の一文は浮かんではいるのに、どうしてもその先が続かないのだ。この話、一生完成しないかもしれない、とかなり弱気になりながらも、翌日は、またドトールへと足を運んだ。

アイスコーヒーを注文し、今日こそは、という思いで階段を昇っていく。そうしたら、なぜなのか。

また私の席に、勝手に座っている人がいる。昨日と同じ、スーツ姿の男性だった。

「そこ、私の席なんですけど！」心の中で訴えた。「誰か、この人に言ってやってくださいよ！」フロアにいる数人のお客さんの顔を見回すも、誰とも目が合わなかった。

それからすぐに、主人公を陰から見守る女を登場させることを思いついた。主人公にはお気に入りのベンチがあつて、そこに関係のない人が座っていたら、その女がそつと近づき、こう告げるのだ。「すみません、そこ、わたしの友達席なんですけど」

あれこれ考えるうちに、この女に語らせてみることにした。最初の一文、〈わたしは「むらさきのスカートの女」と呼ばれている。〉を、〈うちの近所に「むらさきのスカートの女」と呼ばれている人がある。〉に変えたら、物置小屋の片隅でも、書くことができた。

この物語を読んだ人から、こんな質問をいただいた。主人公は二人の女のうち、どちらですか、そもそも二人いるんですか、じつは同一人物なのではないですか。

そんなふうに言われると、本当のところはどうだったのか、書いた本人もよくわからなくなってくる。今回、様々な感想を頂戴し、小説には色々な読み方がある、ということを私自身が教わった。

（初出 「文藝界」二〇一九年九月号）

何とも思わなくなる日

書かなければいけないのに書けない時、何でもいから書くんだ、と自分に言い聞かせている。ほんとうに何でもいい、面白くなくていい、意味がわからなくていい、失敗作でいい、失敗しているかどうかは私じゃなくて編集者が決めるから、私は何でもいからただ書いて送るだけ、あとのことは知らん、と、こんなふうに、少し投げやりな気持ちでいなければ、いつまでたっても書きだすことができないからだ。

何でもいいと言いながらも、書き始めたら大変苦しい思いをする。そうして完成した小説を編集者に送って読んでもらい、OKが出て、少しするとゲラになって手元に戻って来るのだが、この時に初めて後悔することになる。書かなければよかった、と心からそう思う。あんなに「何でもいから書くんだ」と自分を奮い立たせていたのに。

自分の書いたものを読み返す時、何とも言えない嫌な気持ちになる。気持ち悪い、という言葉が一番しつくりくるように思う。

気持ち悪い文章は、やがて雑誌に掲載され、本になり、店頭に並ぶようになるわけだが、外

見がどんなにすてきな姿になったとしても、自分の文章に対する思いは変わらない。ずっと気持ち悪いまだ。書店の本棚を眺めていて、うっかり自分の書いた本の背表紙が目に残りそうになると、素早く視線を外す。本そのものに罪はないのだが、そこに書かれている文章のことを思うと、どうしたって気持ち悪くなるからだ。

六月中旬に芥川賞候補作が発表され、選考の日を迎えるまでの間、何度かテレビ画面に『むらさきのスカートの女』の表紙が映し出された。その度に私はテレビを消し、それが録画されたものであれば、即刻、録画リストからも消去した。夫は録画したはずの「ワイドナショー」がリストに見当たらないので、おかしいなあ、と首をひねっていた。申し訳ない。

こんな感じなのだから、当然、自宅には自分の書いた本は置いていない。本棚に目をやる度に気持ち悪くなっていたのでは、家事も育児も、何も手につかなくなるからだ。私が小説を書くこうとしている限り、こういう感覚はずっとつきまとうのだろうと思う。

この先、自分の書いた本を目にして、平気でいられる日が来るのだろうか。来るのだとしたら、それは一体いつだろう。その時、私は小説を書いているだろうか。たぶん、書いていない気がする。書こうとしてもいないし、書きたいとすら思っていない、自分の文章を気持ち悪いと感じてい

たことなどすっかり忘れ、毎日ニコニコ、楽しく暮らしているに違いない。自宅にしょっちゅう人を招き、強制的に本棚の前へ連れて行き、「見て見て。これ、私が書いた本。私、芥川賞とったことあるんだよ!」と自慢する日々を送っているに違いないのだ。そんな日は、なるべく来てほしくないなあ、と思っている。

(初出 二〇一九年七月二十二日に共同通信より配信)

人と接しない仕事

人と接しない仕事に就きたい、と思ったのは十九歳の頃だった。元々人付き合いが得意でないことに加え、当時の私は過食嘔吐症に悩まされていた。地震でもないのにグラグラ揺れる部屋の天井を眺めながら、人と接しない仕事って、どんなのがあるかなあ、とぼんやりした頭で考えた。

最初に思いついたのは、絵本作家だった。人と接しない仕事。家の中でできる仕事だと思っていたのだ。早速、その場でストーリーを考え始めた。考え始めてすぐに面倒臭くなり、自分には無理だとあきらめた。

次に思いついたのは、漫画家だった。今度は絵本作家より本気だった。漫画家を目指すために道具も揃えた。絵本のストーリーは一つも浮かばなかったのに、漫画のストーリーは二つ浮かんだ。少女漫画誌と青年漫画誌に一つずつ投稿し、青年漫画誌の方に名前が載ったが、三つ目のストーリーが浮かぶことはなく、結局それきりとなった。

私は家の中で働くことをあきらめて、外に出てアルバイトをするようになった。何をやって

も長続きせず、何をやっても全然楽しくなかったが、二十六歳の時に始めたホテルの客室清掃の仕事だけは楽しかった。自分に合っていたし、また、人にも恵まれた。毎日働く気まんまんでいたのだが、ある日、突然の休みを言い渡され、落ち込んだ。客室稼働率に対し、スタッフの人数が多い時は誰かが休む、これは仕方のないことだった。ところが、持ち前の被害妄想の激しさから、当時の私はこんなふうに解釈したのだ。自分が必要とされていない、自分は疎まれている、自分はある人からもある人からも嫌われている、あーあ、どこかに人と接しない仕事はないかなあ。

その時、思いついた職業が作家だった。小説を書こうと思い、すぐに書いた。

人と接しない仕事がしたいと願っていた私は、現在、人に助けられながら日々の生活を送り、からうじて小説を書くことができている。

(初出 二〇一九年七月二十五日 朝日新聞)

ぐるりと回るレストラン

七月十七日夕方、私は編集者二人とビルの最上階にある展望レストランにいた。ここは、ただ眺めがいいだけのレストランではなかった。フロア全体が三百六十度回転する、回転展望レストランなのだった。ゆっくりと流れていく窓の外の景色を眺めつつ、私たちは他愛ないおしゃべりをした。天気の話、ミツバチの話、カレーの話。今は芥川賞選考会の最中で、あと一時間もしれば私の携帯に結果を知らせる電話がかかってくることになっているのだが、誰もその話題に触れることはなかった。たまに会話が途切れ、沈黙が流れた。沈黙すると、三人とも窓の外に目を向けた。

ふと、男性編集者が口を開いた。「あそこに、痔の看板が見えますね」

女性編集者がうなずいた。「痔の看板。朱色だから、よく目立ちますね」

たしかに、平仮名で「ぢ」と描かれた広告看板は、他のどの建物よりも目立って見えた。

「すごい存在感だね」

「ね。目が離せませんね」

編集者二人の会話が妙に面白くて、私はアハハと笑った。と同時に、小学生の頃に見た、懐かしい光景が頭の中によみがえった。それは、選挙ポスターに書かれた落書きだった。

『ぢになった吉井』

吉井さんのポスターに、そんなイタズラ書きがしてあったのだ。黒いフェルトペンのようなもので、横書きで、『吉井』の上に、ふりがなが振ってあった。『よぢい』と。

この話を、編集者二人に聞いてもらいたいと思った。思ったのだが、二人はすでに次の話題に移っていて、今さら私が痔の話を持ち出すのは不自然に思われた。もう言えない、でも言いたい。言うか、やめるか、迷っているあいだにもフロアはゆっくりと回転し、痔の看板は徐々に私の後方へと下がっていった。

その後も他愛ないおしゃべりは続いた。ピアノの話、甥っ子の話、安田大サーカスのクロちゃんの話。どんな話をしていても、私の頭の中から選挙ポスターの映像が離れることはなかった。やっぱり言いたい、どうしても言いたい、理由なんかない、ただ言いたい。私は自分を落ち着かせるため、こう言い聞かせた。大丈夫、このレストランは三百六十度回転する、ということは、必ず、またあの痔の看板の元に戻って来られる、言うならその時に言えればいい、だから、今は

落ち着いて、ギョーザの話に集中しよう。

そうして、まだかまだかと機会を待つこと約一時間。やっと前方に「ぢ」の文字が見えてきた。私はあえてゆつたりとした口調で言った。「また痔の看板が見えてきましたね」

「ほんとうだ」と男性編集者が言い、「そろそろ一周ですね」と女性編集者が言った。

「ところで、痔と言えば、小学生の時に」

と、ここまで言いかけた時に携帯が鳴った。出ると、受賞の知らせだった。

ここはただの回転展望レストランではなかった。元々は「流れる景色を眺めていれば、今村さんの気も紛れるのでは」という、担当編集者の気遣いから選ばれた店だった。おかげで痔の看板ばかりに神経が集中し、賞のことはほとんど意識せずに済んだ。

私がようやく言いたかったことを言えたのは、記者会見場へと向かう道の途中だった。早足で歩きながら、「さつき、痔の看板あったじゃないですか。それで思い出したんですけど」と切りだした。私の話を聞いた編集者がどんな反応をしたかは覚えていない。とにかく、私は言えて満足だった。

(初出 二〇一九年八月一日 毎日新聞)

芥川賞に決まって

今日は夫と娘と三人で朝から近所のイオンへ行った。開店から三十分しかたっていないのに、休日のイオンはすでに家族連れでにぎわっている。娘はお気に入りのキャラクターカートに乗れなくて、着いて早々に機嫌が悪くなった。歩くのを嫌がり、「抱っこ、抱っこ」の繰り返しだ。最近では夫の抱っこを拒否するようになったので、店内ではひたすら私が抱っこした。イオンへ行った目的は、夫の仕事前のズボンを買うことだった。夫の希望は、「とにかく、チャックがしっかりしてるやつ!」。今穿^はいているズボンは、チャックが勝手にずり下がってきて、気づいたら全開になっているようだ。昨日も、ずっと股間に手を当てたまま仕事をしていたという。それは大変だ。早速ユニクロへと向かう。これは? 私が適当に指差すと、「それはおっさんくさいから嫌だ」と四十路^{よそじ}のおっさんが言った。時間がかかりそうなので、私は娘を連れて店の外へ。夫の買い物が終わるまで、キッズスペースで遊んで待つことにする。マットの上で、何度も何度もジャンプする娘。下の階の人から、うるさいと苦情が来て以降、我が家はジャンプ禁止になったのだ。ここなら誰も文句を言わない、思う存分ジャンプするがよい。十五分後、ユニク

口の袋を手にした夫と合流。昼食をとるためフードコートへ移動した。娘と夫はオムライス、私は海鮮丼を注文した。「おいしい？」と訊ねても返答なし。娘はいつも無言で食べる。三人とも米粒一つ残さず完食した。まだ帰りたくないという娘を担いで自転車置き場へ。夫と娘がベアで乗り、私は一人で自転車にまたがった。大和川に架かる橋を渡ったところで二人と別れ、私だけスーパへ。カボチャ、鶏肉、アイスクリームを購入した。

帰宅すると、娘はすでに夢の中だった。夫と二人で、録画していた「なつぞら」を観た。あいだこーだと感想を言い合った後、夫も娘と一緒に昼寝、私は昨夜から散らかったままになっている部屋の片づけに取りかかった。

ブロック、絵本、絵合わせカード、海のパズル、山のパズル、ドラえもんパズル、そしてピカピカに輝く『せんせい』。すべてまとめて布製の箱の中に放りこむ。

『せんせい』をご存知ですか。子供用のお絵描きボードで、書いては消し書いては消しできるやつです。あれが欲しいです」

受賞が決まったその翌日、お祝いに何が欲しいか訊ねられ、厚かましくも即答したのだ。手帳を見ると、ほんの十日前のことだった。そうか、あれからまだ十日しかたっていないのか。何か、

百年くらい前のできごとのような気がするなあ。

時間の感覚があやふやだったこの十日間、小説は一つも書けなかった。明日はどうだろう。

明日こそ何か書けるだろうか。何か書かなくては芥川賞に申し訳ない。

部屋の片づけを終えた後、私も娘の隣りで昼寝した。明日のことはわからないが、ともあれ、今日も平和な一日だった。

(初出 二〇一九年八月二十日付西日本新聞ほか北海道新聞、中京新聞、東京新聞)

芥川賞選評より

滑稽な生きものであるからこそ、人はいとおしい。常軌を逸した人間の魅力を、これほど生き生きと描けるのは、間違いなく今村さんの才能である。

小川洋子氏

「むらさきのスカートの女」の中には、作者今村さんの声がほんとうによく響いていました。今村さんがつくりあげた、今村さんの声を、惜しむことなく美しく聞かせてくれました。一番に推しました。

川上弘美氏

見る側の奇妙な思い込みは、他人を鏡にして自身のいびつさを際立たせるのだが、そのいびつさをなにか愛しいものに変えていく淡々とした語りの豪腕ぶりに、大きな魅力がある。(略)本作を推した。

堀江敏幸氏

今村夏子さんの「むらさきのスカートの女」だけが人間というミステリアスな存在へと筆を向けていたと思う。(略)今回の「むらさきの…」で本領を発揮して、わたしは受賞作として推した。

宮本輝氏

へむらさきのスカートの女を追っている内に補色のへ黄色いカーディガンの女がページを横切って行く。その二人の女にまどわされる小説の楽しみ。少しも大仰でない独得の言葉で、そこはかない恐怖、そして、おかしみの点在する世界に読み手を引き摺り込む手管は見事だと舌を巻いた。

山田詠美氏

(一部抜粋、50音順)

各紙に掲載された書評より

人間がすべて本になったとしたら、本棚にはこんな本が並ぶのではないか。穏やかな朝の外からこちらを見てくる「眼差し」に、ふと振り向かずにはいられない。そういう特別な力を持った物語なのだ。

村田沙耶香氏（二〇一九年七月二十八日 読売新聞）

この作品には修辭の自由と力が漲^{みなぎ}っている。そして記されるのは「どう生きるか」ではなく「どうあるか」である。

西崎憲氏（二〇一九年七月二十五日に共同通信より配信）

かたくなに女を名前では呼ばない「わたし」はいったい何を見ているのか。予想もつかぬ展開となる後半、読者もまた自分が見ているものが分からなくなる。

恐ろしく、切実なのに可笑^{おか}しく、痛みを伴う平易な言葉で綴^{つづ}られた百六十ページ弱の中編である。読むのは決して難しくない。こんな世界があったのかと、震えながら立ち尽くしてほしい。

藤田香織氏（二〇一九年七月十四日 東京新聞）

隙だらけのようで油断のならない筆捌^{さば}きはもはや名人芸の域に達している。物語は後半、思ひも寄らぬ展開となる。読む側の心持ちによって、ユーモア小説にも、不気味な話にも、痛ましい物語にも姿を変える、今村にしか書けない作品である。

佐々木敦氏（二〇一九年三月二十八日 東京新聞「文芸時評」）

（一部抜粋）

書店員さんによる感想

事前にあまり情報を得ずに本書を読むことをお薦めしたい、というのは衝撃的な作品、異色な作品に対してよく使われる言葉ですが、そういう言葉に不安を覚える方も多いと思います。なので不安な方だけ次の文章に付き合ってください。不安を覚えなかった方は、こんな駄文に付き合っている暇があったら、さっさと本書を読み始めてください。最初から真っ黒な画用紙のような恐怖よりも、こぼれた墨に侵食されてやがて真っ黒になったような恐怖のほうが好きだ。と、初っ端から変な例えをししまいしましたが、ホラーという枠組みで語るのはすこし違うような気はしますが、徐々に恐怖のほうへと様相が変わっていくのが、とても印象的な作品です。あまりにも存在感が稀薄な一人称の《わたし》は語り手というよりは監視者というような雰囲気で、そんな《わたし》に不気味さを覚えながら、物語は進んでいく。そして《むらさきのスカートの女》という不確かな存在がくつきりとした魅力を持ち出すと、その不気味さはさらに強まっていく。そして本当に怖いのは、自分にも《わたし》のような側面がかすかに眠っているのかもしれない、と

いう恐怖だ。距離感というものの曖昧さを浮き彫りにする不穏な傑作です。明文堂書店金沢野々市店 瀬戸亮太／この物語は何かおかしい。おかしいのに作品のリズムと歪んだ滑稽さに、もう何がおかしいのかって考える事を辞めさせる力がある。ここが、私たちが生きる世界なんだと思い始めたら、面白くてたまらなくなった。今村作品史上最高にクレイジーな大作!! 一歩好きって言い切ります!! 喜久屋書店松戸店 松本大／最初は風変わりな「むらさきのスカートの女」に心奪われるが、いつのまにか私の異常な献身的行動にくぎ付けになる。ちよつとブラックな思い込み、人間のおかしさを感じた作品です。ジュンク堂書店三宮店 三瓶ひとみ／少しづつ濃みが増えていき濃のようになり、すっきりしないまま残像が残ってしまう。すべてが腑に落ちないまま流れていき、これが日常なのかと思い知らされました。明林堂書店南宮崎店 河野邦広／大きな事件を起こすわけでもない。でも少し世間のベースからはみ出してしまった人々。はみ出していることもちゃんとわかっていて、でもそのベースを崩さない。崩す必要もない。「そんなことしちゃうの?」と思うのだけど、何故か納得がいく行動。今村夏子先生の描く人々は、何処にでもいる私たちなのだ。明林堂書店大分本店 多田由美子／今村夏子さ

んしかいけません。こんなところでもないところに、私を連れ出すのは。なんででしょう。たまらなく好きです。心許無く不安になるのに、何故彼女の作品を読まずにはいられないのか。みんなに読んでほしい、そして教えてほしい、何故これほどまで引き込まれてしまうのか。宮脇書店青森店 大竹真奈美／最初は普通なんだけど。途中から、あれ?おかしいぞ?と。じわじわと恐怖を感じました。フタバ図書TERA広島府中店 沖野めぐみ／まさかこんな事あるわけないよねと思いつつも、どんどん引き込まれて全く抗えない。三省堂書店札幌店 反町美智子／序盤からおかしいぞ、おかしいぞと思いつつも読んでいたけれどまさか、ここまでおかしいとは! 終盤の怒涛の展開には飛び抜けた狂気を感じる。人生で変わった事が起きた時、『むらさきのスカートの女』って小説があったな! と思ってしまうだろう。ジュンク堂書店滋賀草津店 向畑豪／読んでいて、ジワジワとソワソワと落ち着かない感覚でした。人間の嫌な部分や感情が見え隠れする。色々な意味で強烈な印象の残る物語でした。うさぎや 矢口留利／むらさきのスカートの女、黄色いカーディガンの女。彼女たちはすぐ隣にいたような、もしかしたら私かもしれない女。ここかここじゃないか、ぎりぎりここか、私か私じゃないか、ぎりぎり

私じゃないか。危うい感じが心地よいような、不安なような……。紀伊國屋書店さいたま新都心店 河井佐智／「むらさきのスカートの女」と親しくなりたいと思いつつも、でも接触はせず遠回しに工作し近付き、観察をエスカレートさせる姿が、行動力があるんだかないんだか分からずとても薄気味悪くて、言葉にならない恐怖を覚えた。独り虚しい主人公が、勝手に自分と似ていると思いついた人をターゲットに、ただただ「見るだけ」のストーリーキングをする本作は、待ち合わせなどで時間が余った時にふと人間観察をする感覚の延長の様に思い、観察のめり込み方は置いておくとしても共感はある、非常に面白かった。八重洲ブックセンター Kei／「むらさきのスカートの女」を見つめ続けるもう一人の女。その原動力が「彼女と友達になりたい」って言うのとかにかく切ない! もつと他にやり方あるよ……。なんでそんなことしちゃうの……。一歩間違えたら、もしくは端から見たら自分もこうなのではないかと思われしほどに、この女の行動は痛くて辛くて胸が苦しくなりました。不器用にしか生きられない人間の切なさや滑稽さを今村さんが優しく描いてくれた作品です。紀伊國屋書店ららぽーと豊洲店 宮澤紗恵子／友達になりたいという欲望があるにもかかわらず、女に直接何かをするわけでもな

く、ただ監視のようにただつきまとう、それが怖い。「むらさきのスカートの女」の立場が危うくなっていくのを、観察している。過去の今村作品では、作品自体に漂う空気に、気持ちが悪く着かなくさせられていた。しかし今回は、顔の見えない語り手がただただ怖い。殺意や悪意より怖いと私は思う。文信堂書店長岡店 實山美穂／町の変わり者、とまではいかなくとも、日常生活の中で見知った誰かにこっそりとあだ名を付けて呼ぶということは誰にでも経験があるだろう。近しく感じられた、この物語はとてつもなく奥が深い。世の中で一番怖いのはお化けではなく人間だ。成田本店みなと高台店 櫻井美伶／無意識のうちに吸い込み続けていた違和感に気付いた時にはもう手遅れ。胸の中が違和感だらけになっただけ、しかも困ったことに吐き出せない。こんな読後の余韻をくれるのは今村夏子さん以外に知りません。未来屋書店 碑文谷店 福原夏菜美／物語は謎多き「むらさきのスカートの女」の日常について語らることで進んでいくが、同時に読み手の誰かが気になるもう一つ謎が進行する。すなわち、この「むらさきのスカートの女」を観察し続けている、語り部の「わたし」はいったい誰なのか？という謎だ。「わたし」はなぜここまで「むらさきのスカートの女」に固執するのか？ 中盤で「むらさきのス

カートの女」はついに定職を見つけ、安泰な日々を迎えんとする。が、安泰な日々は次にやってくる不穏な出来事の前兆であつたりする。町の「変な人」として語られる「むらさきのスカートの女」と、彼女を取り囲む共同体。本当に「変」なのはどちらなのか？ 淡々と語られる文体はフォークロアのようにも怪談のようにも感じる。今村夏子は常に「異常」と「正常」のあいだに壁などなく、それは日常の中で出たり消えたりすることを作品で表現する。人の「異常」はどこにある？ 伊野尾書店 伊野尾宏之／今のところ、二回読みました。さすがの今村夏子さん、でした。どうしてこんな物語が書けるのか、そのアタマの中が知りたくて仕方ありません。ラストの展開は、ただただ驚きました。「むらさきのスカートの女」は、どうなってしまったのか……。明林堂書店南佐賀店 本間悠／なんてことのない身の回りのエピソードにこんなにゾッとさせられるなんて！ 読むうちに徐々に反転して堕ちていく姿は、我が身にも有り得ると思わせられるに充分なりアリティ。この不穏の中の黒いユーモアは、今村夏子だけの独壇場です！ 梅田 蔦屋書店 荒木智美／「むらさきのスカートの女」は、物語の中で何度も変わっていく。時にはきれいで人当たり良く、そして時には誰からも無視されて孤独に打ちひしがれる。「わた

し」と共に彼女を追っていく事で、もしかしたら読み手である私達の過去の葬り去りたい思い出を追体験する事になるかもしれない。文教堂書店青戸店 青柳将人／どうしてこんなに上手なんだろう。着眼点もそこから広がる展開力もそしてわかりやすい言葉運びも。読後に思わず感服してしまう。「むらさきのスカートの女」はいわゆる奇異の対象なはずなのに、語り手の視線をとおすと何とも愛らしく見えてくる。そしてその偏愛からなのか、対象者であるむらさきのスカートの女の姿がハッキリしてくる程、語り手の足元がグラグラしてくる。このコントラストが絶妙であり、語り手である「黄色いカーディガンの女」を見ている人がいるように思えてくる。それは作品を読んでいる私なのかもしれないが、では私とは何者なのだろう。はたと漠然とした戦慄を憶える。ブックマルシェ津田沼店 渡邊森夫／純粋さの向こう側にある不気味さ。幸せは、人の数ほどあるに違いない。だが、ここまで超越した幸福を描く作家は、今村夏子しかない。ユーモラスで束ねきれない異質さを、私は大変愛している。もっていかれた感覚が深く残る、また忘れられない一冊が増えた。ジュンク堂書店吉祥寺店 田村知世／読み終えた後、よくよく考えてみたら一人だけ異常な行動をとっている人物がいて、その人のむらさきのス

カートの女に対する執着が怖い怖い。だけど、読んでいる最中はその異常性に気づかなかつた。MARUZEN & ジュンク堂書店渋谷店 勝間準／読み手の平衡感覚を失わせるというか、産毛をそっと逆なでする、というか、とにかく「心ざわつき小説」を書かせたら今村夏子は天下第一品だろう。あなたは自分のことをまともだと思ってますか。まともってなんですか、という問い。これを読んで「だからどうだ」というヒトがいるかもしれない。そういうヒトには「だけどそうだ」と答えよう。だけど、そうなんです。精文館書店中島新町店 久田かおり／また今村夏子さんが恐ろしいものを書いてしまった……。私にとって「恐ろしいもの」とは読み終わるのがこわい、勇気がある、でも絶対目が離せずに読み終えてしまうものの事である。もはや誰が「まとも」で誰が「ヘン」なのか。いや、そういう考えこそが邪道なのだと思えてくる。リブコ福岡天神店 奥原未樹子／今村夏子という人は、実はお節介り大好きな作家ではないかと。満たされなく捨ておきた日常も彼女の好意にかかると、どうしても目が離せない物語になってしまふ。止めどなく溢れる感情の泉に浸り読み終えた方は、自分だけの「今村夏子色」に、ぜひこの本を染め上げてほしい。大盛堂書店 山本亮／作者の術中にはまるとは、まさにこのこ

と。すっかり騙されて、でもその手法の上手さに驚き、そして歓喜しました。この作品は実に巧みなイリュージョンだと思います。高屋書店熊谷店 加藤京子／不気味でヤバイのだけれど、楽しいのだ、これがまた。「大好き」と両手を広げてハグするわけにはいかないけれど、予測できない展開が実はたまらなく好きだったります。これが、今村夏子だ。有隣堂伊勢佐木町本店 佐伯敦子／最後の暴走にはカタルシスを覚える。書かれている物語の背景には女性の孤独と貧困といった現代的なテーマもあるように思う。へわたしは「むらさきのスカートの女」の何に惹かれていたのだろう？ 何かに共感していたのだろうか？ ユーモアと、そのあとに残るペーソスが何とも言えない苦みをもたらす。くまざわ書店本厚木店 原口賀尚／ラストシーンで、へわたし」が望んでいたことは友達に欲しいということではなかったのかもしれないと思ひ、愕然としました。不穏ながらもユーモラスな物語に釘付けになりました。丸善名古屋本店 竹腰香里／毎日がつまらない、平坦だ、そう思ってた過ぎていて人にぜひじっくりと読んでほしいなと思います。島根大学生協松江ショップ 堀江梨里／友達になりたい相手にそんなことしちゃダメと心配してしまうのだけれど、たまに我に返って、程度の差こそあれ私にもこういう要素

ないわけじゃないかも、とヒヤリとする。ヒヤリとするのは語り手に向けてのことが大半なのだけれど、徐々に変わっていく「むらさきのスカートの女」に対する同僚たちの掌返しにも思い当たる節があつて、小説の読者という立場だと上から目線で「正しくない行い」と断じてしまう己の我が身を省みない姿勢に気付かされる。そうして思索の網に囚われているうちに、思わぬ展開に放り出されていた。三省堂書店海老名店 大谷友美／全編から漂うただならぬ緊迫感と奇妙な違和感……。異様な世界が狂気を帯びつつ大きな普遍性を持って眼前に映し出される。その反転がとにかく見事！ もはや凄みしか感じられないこの一冊は著者の新たな代表作となるに違いない！ 三省堂書店有楽町店 内田剛

(敬称略)

『むらさきのスカートの女』 本文試し読み



うちの近所に「むらさきのスカートの女」と呼ばれている人がいる。いつもむらさき色のスカートを穿いているのでそう呼ばれているのだ。

わたしは最初、むらさきのスカートの女のことを若い女の子だと思っていた。小柄な体型と肩まで垂れ下がった黒髪のせいかもしれない。遠くからだと中学生くらいに見えるかもしれない。でも、近くでよく見てみると、決して若くはないことがわかる。頬のあたりにシミがぽつぽつと浮き出ているし、肩まで伸びた黒髪はツヤがなくてパサパサしている。むらさきのスカートの女は、一週間に一度くらいの割合で、商店街のパン屋にクリームパンを買いに行く。わたしはいつも、パンを選ぶふりをしてむらさきのスカートの女の容姿を観察している。観察するたびに誰かに似ているなと思う。誰だろう。

うちの近所の公園には、「むらさきのスカートの女専用シート」と名付けられたベンチまである。南側に三つ並んでいるうちの、一番奥のベンチがそれだ。

ある日のむらさきのスカートの女はパン屋でクリームパンを一個買い、商店街を抜けて公園へと歩いて行った。時刻は午後三時を回ったばかり。公園に植えられたアラカシの葉が「むらさきのスカートの女専用シート」に木陰を作っていた。むらさきのスカートの女はシートの真ん中に腰を下ろし、買ったばかりのパンを食べた。なかのクリーム

がこぼれ落ちないように、左手を受け皿のようにして食べていた。アーモンドの飾りが付いた部分は少しの間眺めてから口に入れ、最後のひと口は名残惜しそうに、特に時間をかけて噛んでいた。

その姿を見ていて思った。むらさきのスカートの女はわたしの姉に似ている気がする。もちろんまったくの別人だということはわかっている。顔が全然違うから。

姉も、むらさきのスカートの女みたいに最後のひと口に時間をかけるタイプだったのだ。妹のわたしに口喧嘩で負けるようなおとなしい姉だったが、食べものに対する執着だけは人一倍強かった。一番好きな食べものはプリンで、容器の底に残ったカラメルをスプーンですくい取り、それを十分でも二十分でも、飽きることなく眺めていた。食べないならちょうだい、と、わたしが横からパクツと食べてしまった日には、家中が引っくり返るほどの大喧嘩へと発展したものだ。あの時、姉に引つかかれてできた傷跡は、今もわたしの左の二の腕に残っている。おそらく姉の右手の親指にも、あの時わたしが噛みついてできた歯形の跡が残っているはずだ。親の離婚をきっかけに一家が離れ離れになって二十年。姉は今頃どこで何をしているのだろう。一番好きな食べものはプリンだとわたしは思っているが、それも今は変わっているかもしれない。

むらさきのスカートの女がわたしの姉に似ている気がするということは、むらさきのスカートの女は、妹のわたしにも似ているということになるだろうか。ならないか。共通点なら、無いこともないのだ。あちらが「むらさきのスカートの女」なら、こちらはさしずめ「黄色いカーディガンの女」といったところだ。

残念ながら「黄色いカーディガンの女」は、「むらさきのスカートの女」と違って、その存在を知られてはいない。

「黄色いカーディガンの女」が商店街を歩いたところで、誰も気にも留めないが、これが「むらさきのスカートの女」となると、そうはいかない。

例えば、アーケードの向こう側からむらさきのスカートの女の姿が見えただけで、人々の反応はわかりやすく四つに分かれる。一、知らんふりをする者。二、サッと道を空ける者。三、良いことあるかも、とガッツポーズする者。四、反対に嘆き悲しむ者（むらさきのスカートの女を一日に二回見ると良いことがあり、三回見ると不幸になるというジンクスがある）。

むらさきのスカートの女がすごいと思うのは、周りの人間がどんな反応を示そうと、

決して自分の歩みのペースを変えないことだ。一定の速度で、スイスイスイと人混みをすり抜けて行く。不思議なことに、週末のどんなに人通りの多い時間帯でも、決して物や人にぶつからないのだ。あれはよほど優れた運動神経の持ち主か、もしくはおでこにもう一つ目が付いているかのどちらかだと思う。周りに気づかれないよう前髪で隠しているが、じつは第三の目でぐるり三百六十度を見渡せているに違いない。いずれにせよ、黄色いカーディガンの女には真似のできない芸当だ。

あまりにも見事によけて歩くので、こちらからわざとぶつかりに行ってみる、なんていうおかしな人間が出てくるのもわかる気がする。じつはわたしが、そのおかしな人間のうちの一人だったりする。みんなが失敗しているように、わたしも失敗した。あれは今年の春先だったか、普通に歩いていると見せかけて、数メートルほど手前から突如スピードを上げ、むらさきのスカートの女めがけて突っ込んだのだ。

馬鹿なことをしたと今はそう思う。すんでのところで、むらさきのスカートの女はするりと身かわし、わたしは勢いあまって肉屋のショーケースに体ごと激突、幸いにも無傷で済んだが、店側から多額の修理代金を請求されるはめになったのだから。

あれから半年以上が経過して、つい最近、ようやくあの時の修理代を払い終わった。

ここに至るまで容易なことではなかった。月に一度、売れそうなものを探してきては小学校のバザーに潜り込み、小銭稼ぎみたいなことまでやったのだ。何をやっているんだか、と、始めた当初は毎回そう思っていた。もう二度と馬鹿な真似はしない。そもそも、むらさきのスカートの女にぶつかりに行って成功した者は、過去に一人もないと言われているのだ。おでこに第三の目が付いていないのだとしたら、彼女はやはり運動神経抜群に違いない。むらさきのスカートの女と「運動」の二文字が、どうも似合わない気がするが。そういう目で見てみれば、人混みをすり抜ける時の軽やかな身のこなしは、氷の上を自在に滑るフィギュアスケートの選手に通じるものがある。一昨年の冬季オリンピックで銅メダルを獲った女の子に、そういえば雰囲気似ている気がする。青い衣装の、おばちゃんみたいな喋り方をする子だ。引退してからはタレントに転身し、去年、子供番組の司会に抜擢^{はつてき}された。最近では「子供の好きなタレントランキング」第一位を獲得した、あの女の子。あの子と比べると、むらさきのスカートの女のほうがずっと年上ではあるが、知名度は（うちの近所に限って言えば）、同じくらい高い。

そう、むらさきのスカートの女は、大人だけでなく、子供たちにもその存在知られているのだ。商店街には時々テレビの取材が来ているが、インタビュをする人は「今

晩のおかずは何ですか？」とか「野菜が値上がりしましたね」とか、主婦にばかりマイクを向けるのではなく、たまには老人や子供に向けて、こんな質問もしてほしい。

『あなたはむらさきのスカートの女を知っていますか？』

ほぼ全員が、「知ってる！」と答えるはずだ。

近頃、子供たちの間で流行^{はや}っている遊びに、こんながある。ジャンケンをして負けた人間がむらさきのスカートの女にタッチする、という遊びだ。単純なルールだが、これが結構盛り上がるのだ。遊び場所は近所の公園。専用シートに腰かけているむらさきのスカートの女に、ジャンケンに負けた子供が、そうと近づいて行き、ポン！と肩にタッチする。ただそれだけ。タッチしたあと、子供は笑いながら走って逃げる。それを何度も繰り返す。

この遊び、元々はタッチじゃなくて、むらさきのスカートの女に向かって一声かけるというルールだった。ジャンケンをして負けた人間が、専用シートに座っているむらさきのスカートの女のところでトコトコ歩いて行って、「こんにちは」とか「どうも」とか、ただ言葉をかけるだけだった。それでじゅうぶん盛り上がっていた。子供たちはむらさきのスカートの女に向かって何か一言発すると、キャッキヤッと笑いながら逃げ

て行った。

ルールが改正されたのは割と最近のことだ。改正の理由は「飽きたから」だ。声をかけるほうも、かけられるほうも。元氣？ とか、良い天気ですね、とか、子供たちの口から出てくる言葉はちっとも代わり映えしなかった。ひねり出したところで、ハーウィーユー？ とか、退屈なものばかり。この遊びが始まった当初、常に下を向き、身じろぎ一つしなかったむらさきのスカートの女にも、次第にあくびをしたり、爪をいじったりといった余計な動作が目立つようになっていった。けだるげにセーターの毛玉を取る姿なんかは、傍^{はた}から見るとワンパターンな子供たちを挑発しているようにも見えた。

マンネリを打破する為に、子供たちが輪になりおでこを突き合わせて考え出したこの新ルールは、すでに定番になりつつあるが、今のところまだ飽きたという声は上がっていない。ジャンケンポンのかけ声にも力が入る。勝った子は飛び上がって喜ぶし、負けた子は悲鳴を上げる。子供たちがジャンケンをしている間、むらさきのスカートの女はじつと専用シートに腰かけている。両手を膝に置き、下を向いているところを見ると、まだ新しいルールに慣れていないのかもしれない。肩をポン！ と叩かれる瞬間、いつでもどんな気持ちができるのだろう。

「続く」

今村夏子プロフィール

一九八〇年広島県生まれ。

二〇一〇年「あたらしい娘」で太宰治賞を受賞。

「こちらあみ子」と改題し、

「同作と新作中編『ピクニック』」を収めた

『こちらあみ子』で二〇二二年に三島由紀夫賞受賞。

二〇一七年『あひる』で河合隼雄物語賞、

同年『星の子』で野間文芸新人賞を受賞。

著書に『父と私の桜尾通り商店街』がある。

大切な人が信じていることを、
わたしは理解できるだろうか。
一緒に信じていることができるだろうか……。

星の子

今村夏子

もうひとつの代表作
ロングセラー
8刷

第39回 野間文芸新人賞 受賞作

第157回 芥川賞 候補作

2018年 本屋大賞 ノミネート

第8回 Twitter文学賞 4位

第1回 未来屋小説大賞 4位

キノベス! 2018 5位

主人公・林ちひろは中学3年生。出生直後から
病弱だったちひろを救いたい一心で、両親は
「あやしい宗教」にのめり込んでいき、その
信仰は少しずつ家族を崩壊させていく。



定価1,400円+税 四六判